

# 京都部落問題 研究資料センター通信

第74号

発行日 2024年1月25日(年4回発行) 編集・発行 京都部落問題研究資料センター

京都部落問題研究資料センター主催の「差別の歴史を考える連続講座(全六回)」の第五回(十月二七日)と第六回(十一月十日)の講演の要旨を紹介します。詳しくは年度末に発行予定の講演録をご覧ください。

### 第五回

#### 日本の識字問題から

#### 「人権」について考える

講師 棚田 洋平さん

(京都部落解放人権研究所 事務局長)

識字率とはユネスコによって「日常生活の簡単な内容についての読み書きができる十歳以上の人口の割合」と定義づけられている。日本の識字率は「九九・〇パーセント」というのが通説で、一九六〇年代のユネスコの「日本の識字問題」の調査でも、文部省は「日本に識字問題は存在しない」「すでに解決済み」と回答している。これが現在の日本の識字施策(日本語教育も含める)に影響を与えていると棚田さんは講演の冒頭に語った。

日本政府は「識字問題は存在しない」と言いながらも、識字率が

「百パーセント」と言い切れずに「九九パーセント」と言っている。ということは、残りの「一パーセント」は非識字、文字の読み書きに困難を抱えている人がいるということになる。日本にも識字問題は存在するのだ。

日本の人口の「一パーセント」というと約百万人ということになる。けっして少ない数字ではない。残念ながら日本の識字、非識字者の実態調査はないが、以下の三つの問題の調査から「日本の識字問題」が見えてくる。その一つ目が「不登校の問題」。小学校に行くことができない児童が十五万人。小学生の約一・七パーセント。中学校に行くことができない生徒が一九万四千人。中学生の約六パーセントである。この子どもたちが社会へ出た時に、小学校、中学校で十分学べていないので、読み書きや、コミュニケーションなど様々な困難を抱えるということは容易に想像ができる。もう一つは「義務教育未修了者の問題」。二〇二〇(令和二年)の国勢調査によれば、まったく学校に行かなかったという未就学者が九万四千人。また、この調査で今回初めて、最終卒業学校が小学校という義務教育未修了者がカウントされ、八万四千人と判明した。小学校未就学と義務教育未修了を合わせる

と九十万に近く上る、先ほどの九九パーセントの残りの一パーセントにあたる約百万人にほぼ匹敵し、日本にも識字に困難をかかえている人たちがいることが明らかになった。三つめは「外国籍の人たちの問題」。日本に住まう外国籍の人たちも年々増加している。コロナ禍で一時的に減少したが、また増加に転じた。二〇二三年六月末の集計では、はじめて三百万人を越え、三二二万四千二人となった。日本全体の人口比で見ると二・六パーセントである。これは在留外国人の数であり、オーバーステイの人数や、日本籍で外国にルーツを持つ人たちは含まれていない。それらを含めるとさらに数字

が大きくなるのは言うまでもない。学校に行けない、文字の読み書きが出来ないことの背景に目を向けると、女性に対する差別的な考え方が存在する。「女性は家庭にいればいい」、「学校へ行く必要はない」という考え方が女性を教育的弱者へと追いやっていった。また、日本でも先の戦争が学校に行けない大勢の子どもたちを生み出した。もう一つは貧困。家庭が貧しく子どもの頃から働いているので学校へ行けないという状況もある。大卒でいうとこの三つが学校に行けない背景、あるいは文字の読み書きが出来ない背景である。

非識字というと全く文字の読み書きができないというイメージがあるが、現在の日本の非識字の状況を見ると、文字の読み書きが全くできない人たちは少ない。平仮名や片仮名はわかるが、漢字がわからないとか、読めるけど書けない、文字の読み書きはある程度できるが、計算は難しいというように様々なバリエーションが存在す

る。こういう人たちが見過ごされてしまっている状況にある。このような非識字の人たちが学び直したり、日本語を習得したりすることに直接かわるのは「夜間中学」、「識字学級」、「日本語教室」である。それが現在、日本にどれくらいあるのかというと、「公立夜間中学」は一七都道府県に四四校。二〇一六年に制定された「教育機会確保法」以来、国は都道府県、政令市に少なくとも一校の夜間中学の設立をめざしている。「識字学級」については部落解放・人権研究所が二〇二一年に全国の識字学級の実態調査を行った。調査に協力をしたところだけで全国に二百学級。この中で最も多いのは日本語教室であるが、正確な調査は行われていない。

このように識字の場、実践の場というのは日本にも結構存在している。そして、それらには高齢者だけではなく若い世代も多く通っている。識字活動は学習する場の提供だけでなく、仲間とつながる

ことのできる「居場所」をつくることが重要である。また、学習者と支援者が支援される側と支援する側という関係ではなく、「対等な関係」であることも見逃してはならない視点だ。

最後に大阪の四條畷市の識字基本計画を例に出して、識字活動は識字学級や日本語教室などが単体で活動するのではなく、識字基本計画のような公の支えがあつて、識字等の取り組みが大切にしてきた「居場所」や「対等な関係性」など、学習者に基づいた教材づくり、活動づくりをいかに伝えていくのかが重要になってくると講演を締めくくった。

出たとする言説のこと」であり、大正期における歴史学の研究対象の拡大のなかで、社会政策・社会運動のための理論構築を意識しつつ考え出された学説の一つである。一九二一年に社会学者の佐野学によつて三浦周行の法制史研究と喜田貞吉の被差別民史研究とを理論的に統合する形で編み出された。通常この説に付随して「幕藩権力が創り出した『土農工商』という階級秩序の最下層に『穢多』『非人』という賤民身分が位置づけられていた」と説明される。

この説は一九六〇年代以降、研究・運動・教育の各方面において強い影響力をもつていて、ある時には「天まで持ち上げられて一世を風靡した」というふうに評価されている。ただしこの説は一九九〇年代頃から学術的に多岐にわたる論点で盛んに批判されるようになる。「中世の被差別民は近世の権力が出来る前に存在しており、そういった中世の被差別民と近世の政治権力によつて創られたとき

第六回  
近世政治起源説はなぜ一世を風靡したのか  
—社会思想史の視点から—  
講師 佐々木 政文さん  
(京都先端科学大学人文学部准教授)

近世政治起源説とは「近世の政治権力が、今日の被差別部落に繋がる『賤民』身分を人為的に創り

出したとする言説のこと」であり、大正期における歴史学の研究対象の拡大のなかで、社会政策・社会運動のための理論構築を意識しつつ考え出された学説の一つである。一九二一年に社会学者の佐野学によつて三浦周行の法制史研究と喜田貞吉の被差別民史研究とを理論的に統合する形で編み出された。通常この説に付随して「幕藩権力が創り出した『土農工商』という階級秩序の最下層に『穢多』『非人』という賤民身分が位置づけられていた」と説明される。

この説は一九六〇年代以降、研究・運動・教育の各方面において強い影響力をもつていて、ある時には「天まで持ち上げられて一世を風靡した」というふうに評価されている。ただしこの説は一九九〇年代頃から学術的に多岐にわたる論点で盛んに批判されるようになる。「中世の被差別民は近世の権力が出来る前に存在しており、そういった中世の被差別民と近世の政治権力によつて創られたとき

れる賤民身分が、どういう関係にあるのかということが整合的に説明できない」とか、「近世前期における『賤民』身分の成立が、はたして今日の被差別部落の起源といえるのかということが不明確である」といったようなことから批判の対象となつている。

本講演では「近世政治起源説」というのは学術的に不完全な説であるにもかかわらず、なぜこれほど日本社会に浸透したのか」ということを近世史や部落史の問題としてでなく、近現代史や思想史の問題として考えていくと説明し、佐々木さんは講演を始めた。

一九三〇年代の融和運動においては、歴史の専門家ではない運動家たちが、差別撤廃のための啓蒙活動を展開するなかで、近世政治起源説を拡大解釈したことで生じた抑圧移譲政策説とともに中央融和事業協会の通説となった。「近世封建社会では上から下への抑圧移譲が当たり前に行われていた」という三好伊平次の説が、一九三〇年代初頭に近世政治起源説と結びつけられ、幕府は百姓・町人の不満を逸らすために「穢多」・「非人」身分を創出したという俗説が誕生した。一九四〇年代末には、部落解放全国委員会の運動家や、部落問題研究所の研究者たちによつて採用・宣伝された。一九五〇年代初頭に、奈良本辰也のような専門的歴史家が、自身の著作のなかで無批判に抑圧移譲政策説を採用したことが、この説の無根拠性を覆い隠した。

元々は明確な意図をもって生み出された政治的主張ではなく、非専門家が学説を誤解したことによつて生じた固定観念だった。ただし、こうした固定観念が容易に広まってしまふのには、一九三〇～五〇年代の日本の知識層には封建時代の政治権力に対する憎悪が広まっていたと言える。

一九五八年には部落解放同盟が「部落問題は全国民にとつての重要課題である」という国策樹立運動の論理を推し進めるなかで、組織の公式見解として近世政治起源説を採用した。一九五八～五九年には、現代の政治権力に対する批判を含蓄する言説として、部落解放同盟の運動方針のなかに取り入れられていった。

近世政治起源説は、既に戦前の時点で、水平運動と融和運動の両者に共有された歴史認識であった。それゆえに、戦後にはこの認識が研究・運動・教育の各方面へと容易に浸透した。近世政治起源説が、部落解放運動における行政闘争を正当化する論理として用いられるようになったのは、あくまでも一九五八年以降のことである。それ

以前から、この説は急進派・保守派双方の運動のなかで一定の地位を確立していた。一九六〇年代前半に異民族起源説（人種起源説）が政治的に排除されると、近世政治起源説に対抗できる説が存在しなくなり、近世政治起源説の覇権が確立した。一九六五年の同和対策審議会答申は、一九五八年以降の部落解放同盟の主張を認める形で、起源論争に触れることを避けながらも、被差別部落民は「日本国民」であることを強調した。

一九六〇年代後半以降には、同和教育の領域で近世政治起源説にもとづく部落史教育が展開される。その過程で兵庫県公立高校教員の安達五男などにより地域史料が発掘され、教材化されていった。

佐々木さんは講演の最後に、戦前の水平運動・融和運動からの連続性を意識することなく、専ら戦後の部落解放運動・共産党運動・同和教育との関係から近世政治起源説の意味を説明しようとしてきた従来の見方は修正を要すると述べた。

二〇二四年度  
差別の歴史を考える連続講座「近江と食肉文化」補遺

## 『太湖』掲載の「食牛の近江」から

亀岡哲也（滋賀県地方自治研究センター）

昨年の京都部落問題研究資料センターの差別の歴史を考える連続講座で『近江と食肉文化』をテーマに話させていただいた。その際、近江における食肉の生産にかかる基本情報として、昭和三九年（一九六四）刊行の『彦根市史 中冊』「第四編近世 第四章経済 第四節農業及び水産業」の「三 狩猟・畜産」に立項される「彦根牛肉」を取り上げ、考察を加えた。

しかし、時間の都合、また記述の典拠資料が明確でないため、幕末の江戸における彦根牛肉の販売については言及しなかった。このほど、看過してしまっていた先行の新聞記事が、彦根牛肉の江戸販売

を裏付ける資料に触れていることに気がついたので、ここで紹介させていただくこととした。また記事では、近代の滋賀県における牛肉食の普及を示す著者自身の体験談が語られているので、次号の後半で考察したい。

『彦根市史』の彦根牛肉の項の末尾は次の一文であるが、前述のように裏付けとなる資料の提示を欠いている。

なお、安政二（一八五五）年、

彦根魚屋町の勘治は江戸神田鍋

町・両国吉川町・日本橋四丁

目・四ツ谷の四力所で彦根牛肉

の看板を掲げて開業したと伝え

られている。（二六九頁）

この記述に関連して紹介するの  
が昭和六年（一九三一）三月九日  
発行の『太湖』第六二号から第六  
四号まで三号にわたり上中下とし  
て連載された近松文三郎による  
「食牛の近江」である。

『太湖』は滋賀県蒲生郡の八幡  
町が町史編纂を行うにともない、  
資料収集の便を図って同人により  
刊行されていた月刊新聞である。

町史編纂は大正十四年（一九二  
五）に開始され、『太湖』の初号  
は翌十五年二月に発行されている。  
全号を近江八幡市立図書館のホー  
ムページ歴史浪漫デジタルアーカ  
イブから閲覧できる。町史の編纂  
は中断を挟むものの、昭和十五年  
（一九四〇）に『滋賀県八幡町史』  
として、全三巻の刊行をみている。

近松は町史編纂委員の一人で、  
『太湖』の編集の中心を担ってい  
た。なお近松については次号の後

半で詳しく触れることとする。

その「上」は、「我国も古き時  
代には随分肉食も行はれて居つた」  
で始まり、仏教の普及とともに肉  
食が廃れることを前段とし、注目  
される部分に続く。少々長くなる  
が引用したい。

左れど徳川時代にありても内  
密或方面にては食用せる事実が  
ある、一般普及せるは実に明治  
以後に属せるは争はれない。

一例として見るべきは、嚙矢  
は不明なるも、彦根藩に於て幕  
府へ牛肉の味噌漬を養生食品と  
して献納するを毎年の嘉例とし  
て居つた。將軍家にて撰取せら  
れしものか、既に公然此く献上  
品たりしもの同藩にては夙には  
を食用とせし風習ありしは推知  
せらるる。

更に近頃面白き文献を発見し  
た、そは八幡市田清兵衛家の日  
記中に散見せる左の文字である。

安政二年六月三日、彦根魚屋

町勘治と申人牛肉商売致し江

戸売弘所四ヶ所、当家名前の

看板出しあり、津田村吉右衛

門頼み右町役茶屋三郎兵衛殿

へ掛合候處、勘治誤り、町役

より取喰、右看板来九月迄に

引寄せ、名前の所切渡被申候

引合にて、一札受取事済致す。

十二月廿七日、牛肉看板の義、

神田鍋町、両国吉川町焼致し

し、仮看板江州彦根同所八幡

藤田勘兵衛と有之趣、通り四

丁目、四ツ谷方看板当人へ相

渡、屋根其儘に御座候趣申参

る。

安政三年二月十九日彦根出入、

牛肉看板四枚の内二枚焼失、

二枚分切抜き、名前の所被渡

請取帰る。

此等に依り今より約八十年以

前に彦根の人が江戸にて牛肉を

販売せしものがありしを知り得

た、従つて彦根にて前述の如く

早くより牛肉食用の風習ありし

と共に、江戸に於ても相当に販

売せられ、其店舗所在地が、神

田鍋町、両国吉川町、日本橋通

四丁目、及四ツ谷であつたこと

が窺はれる、八幡町麻屋清兵衛

(市田の屋号麻屋)なる名称を

用ひたるは上州高崎に其支店あ

り江戸とは交渉浅からず、殊に

江戸に於ける江州八幡の名称は

其中枢たる日本橋通りに多数の

出店存在、夙に江戸人士の耳目

に親しみあり、此くて販売宣伝

に利用せるものと信ぜらる」

(三面)

『彦根市史』の記述がこの記事

に引用される市田清兵衛家の日記

にもとづくものであることは明ら

かである。ただし江戸で牛肉店を

開いた勘治が八幡商人の名を詐称

し、露呈してしまつた一件にかか

わるものであることから、詳細に

は立ち入ることがためらわれたの

かもしれない。

若干の補足しておく。

市田家は八幡町の豪商の一軒で、

近松は後に『太湖』の一三四号か

ら一六二号にかけて二一回の分載

で「市田清兵衛家事歴」を執筆し

ている。

安政二年(一八五五)は十月二

日に安政江戸地震が発生、影響で

各所から出火して大火となつたこ

とが知られている。看板のうち、

神田と両国の二枚が六月から十二

月の間に焼失しているのは、地震

に伴う火事のためという可能性も

あるだろう。

『太湖』六三号の「食牛の近江

(中)」は次の文章で始まる。

「前号の拙稿を見て、在阪北村寿

四郎氏より三月十一日寄せられた

る書中に左の記事があつた、『拙

子は「元禄以来菓喰の牛肉奇談」

編纂致居本月出版に取かかり可申

未知のこと、大変面白く喜び居候

(略)」

差出人の北村寿四郎については、

駒井喜一の『近江人要覧』(近江

人協会、初版は一九三〇年、増補

改訂第二版一九三四年)に経歴と

人物写真が掲載されている。『彦

根市史 下冊』の巻末に付された

「跋」から得られる情報をあわせ

ると以下のようにまとめられる。

幕末の文久元年(一八六一)彦

根藩士大久保家に生まれ、明治十

八年(一八八五)に元彦根藩士の

北村家の養子となつた。職歴とし

ては明治十二年に彦根初等師範学

校を卒業、県内各地の小学校に訓

導、校長として勤務したのち、大

正四年(一九一五)には彦根町立

図書館に勤務、同六年に始まつた

町史編纂事業を担当するも病気の

ため大正八年二月に辞職した。な

お町史編纂は北村の退職に伴い、一

旦中止となっている。その後、大阪

に居を移すも、彦根を中心とす

る近江の歴史研究を継続していた。

同書のあげる多数の業績に「牛肉二百五十年史」の名がみえ、手紙文中の「元禄以来薬喰の牛肉奇談」にあたるとみられる。出版にはいたらなかったようであるが、彦根市立図書館に所蔵されている「北村文書九牛肉二百五十年史」の複製本が、東京の食肉業者「栗田」によって、『日本食肉史基礎資料集成』の第一三八輯（一九八三年）と第三五〇輯（一九九二年）に上下として発行されている。これも少数部の流通であるが、同志社大学の関口寛先生のご尽力で閲覧がかなった。記してお礼申し上げたい。

なお『彦根市史』の彦根牛肉の項は執筆一覧に中沢成晃担当となっており、北村の名はないが、その記述はほぼ「牛肉二百五十年史」に重なっていること

を指摘しておきたい。

複製本の『牛肉二百五十年史』には次ぎのように『太湖』の近松執筆記事への言及がある。出版にむけて、原稿を何度も改めたようである。

一八 江戸に於て牛肉販売

彦根魚屋町の勘治が安政二年江戸は神田鍋町、両国吉川町、日本橋四町目、四ツ谷の

四ヶ所に於て彦根牛肉の看板を掲げて発売したことが、江州八幡の人近松文三郎氏編纂昭和六年三月九日発行「太湖」第六十二号（西川太治郎贈）に「食牛の近江」と題したる其内に八幡市田清兵衛の日記に散見すると左の如く記述してある

以下には、『太湖』掲載文を転記し、北村自身の考察若干が付されている。

なお、「彦根魚屋町勘治」と江戸店舗、また商品である牛肉の仕入れ経路や販売などの具体的なところは、残念ながら『牛肉二百五十年史』にも言及がなく、今後の課題である。

部落史とのかかわりでいえば北村寿四郎は蒲生郡北比都佐村の被差別部落についても貴重な調査報告を残されているので付記しておきたい。

その「蒲生郡北比都佐村大字豊田概況」はすでに瀬川欣一著『ある被差別部落の五百年』（滋賀県同和問題研究所、一九八八）、

『日野町同和事業史』（部落問題研究所編、日野町発行、一九九二）等で取り上げられているが、瀬川によると「これは、北比都佐村が村政の一環として大字豊田の改善事業に取り組むため、まず村の当局者が議員・教員・僧侶・医師・近江商人の富豪者などを集めて、改善のための会

議を催した際に、大字小谷にあった必佐下尋常小学校の代用教員であった北村寿四郎という先生が改善事業推進のための基礎資料として精力的に実情を調査して統計的にまとめた大字豊田の生活現況」で、成立年次を欠くが、「大正元年か翌二年に書かれたもの」（二五七頁）である。滋賀県で早い時期から活動があったことで知られる、豊田の地域改善団体である輯睦会の成立を前掲の二書ともに大正二年十二月としていることから、瀬川の推定は首肯しうる。

次回（センター通信七五号に掲載予定）では、近松文三郎の見聞した明治維新後の生活の変化、それに伴う大津や八幡町における牛肉の普及、生産と販売の拡大、家庭での食事の姿などをみていくこととしよう。

研究会編刊 2023.10)

◇特集 優生思想を問う～優生訴訟と生きる権利～  
松村尚美

◇藤崎宮祭礼と「ボシタ」—『西遊日記』が伝えるもの— 吉田文男

■**部落問題研究 246**■ (部落問題研究所刊 2023.9) 1,163 円

◇足利・館林・新田の長吏とその由緒 牧原成征

◇書評 人間存在への限りなく深い洞察に触れる  
—ルビンシュテイン著小野隆信訳『人間と世界』—  
築山崇

◇部落問題文芸作品年表—明治篇 秦重雄

◇川口學さんに聞く—福岡県糟屋郡での部落問題  
解決への歩み 石倉康次

◇研究紹介

・奈良県の地域構造変容と部落問題に関する歴史的  
的研究—地域構造分析・比較研究を通して 竹永  
三男

・戦時・戦後における大都市近郊地域の歴史的変  
容と「生活課題」—兵庫県明石市の分析 本井優  
太郎

・高度成長期の地域変動と社会運動—泉北に於け  
る文化財保存運動と泉北教組— 森下徹

・近世における流動層社会の構造的研究—「行き  
倒れ」を中心に— 藤本清二郎

■**部落問題研究 247**■ (部落問題研究所刊 2023.12) 1,163 円

◇都市周縁の寺—竹林寺—周辺村方史料から照射  
する 塚田孝

◇近世踏瀬宿における村継送りと移動—奥州「流  
動層」の具体像 1— 藤本清二郎

◇五六年目の国民投票—オーストラリア先住民が  
直面した新たな現実 鈴木清史

◇部落問題文芸作品年表—昭和・戦前篇 秦重雄

■**ふらっと39**■ (鳥取県人権文化センター刊 20  
23.10)

◇特集 部落差別がある社会を変えるために

■**本願寺史料研究所報 65**■ (本願寺史料研究所  
刊 2023.9)

◇近世の本願寺、その日その日—近世の長崎御坊  
の—コマー 左右田昌幸

■**むこうにみえるは ウェーブ 21 通信 28**■ (人  
権ネットワーク・ウェーブ 21 刊 2023.11)

◇第四次産業革命と公教育～コロナ禍における教  
育の実際と変容について～ 6 人権ネットワー  
ク・ウェーブ 21

■**ゆいばる 51**■ (姫路市人権啓発センター刊  
2023.11)

◇特集 人権問題について考えよう～人権について  
の姫路市民意識調査結果から～

■**良き日のために 31**■ (日本基督教団部落解放  
センター刊 2023.12)

◇第 15 回部落解放全国会議 in 京都 報告

◇ブックレビュー 黒川みどり著『被差別部落に生  
まれて 石川一雄が語る狭山事件』 加藤恵

■**リベラシオン 192**■ (福岡県人権研究所刊  
2023.12) 1,320 円

◇福岡の水平運動における階級闘争への進出 朝治  
武

◇プロレタリア文学と先住民問題—鶴田知也の  
「コシャマイン記」におけるアイヌ闘争と連帯  
の探求 ミヒールセン・エドウィン

◇同和教育の制度化が内包した課題 2—自治体に  
よる同和教育基本方針の作成と課題— 板山勝樹

◇小倉藩の牢屋—近世後期仲津郡大橋牢の事例 2  
— 川本英紀

◇書評 板山勝樹著『戦後日本における反差別教育  
思想の源流～解放教育思想の形成過程』 森山沾  
一

■**和歌山研究所通信 81**■ (和歌山人権研究所刊  
2023.10)

◇戸籍制度と人権 床谷文雄

◇夫婦別姓問題とは 古久保さくら

■**和歌山研究所通信 82**■ (和歌山人権研究所刊  
2023.11)

◇人権に関する日本政府と社会の課題—国連・人  
権理事会作業部会の意見書から— 池田清郎

◇小林一茶が詠んだ句 1 藤里晃

- ◇存在を黙殺された北陸の部落
- ◇特集 朝鮮衡平社創立 100 周年
- ・朝鮮衡平運動の歴史と意義 吉田文茂
  - ・水平社と衡平社の連帯に関する重要史料 朝治武
  - ・(報告) 韓国で迎えた衡平社創立 100 周年 廣岡 浄進
  - ・小説 烽火があがる時に 洪思容 翻訳、徐知伶 補筆、水野直樹
- ◇本の紹介
- ・水野直樹編『植民地朝鮮と衡平運動—朝鮮被差別民のたたかい』山下隆章
  - ・風巻浩・金迅野著『ヘイトをのりこえる教室—ともに生きるためのレッスン』孫美幸
- ◇全同教結成 70 周年：先達が残したものの「志を継ぐ」ために 古川正博
- ◇美空ひばり 女王が背負ったニッポン 2 少女期 ゲテモノと呼ばれた幼きレジェンド 藤田正
- 部落解放 847■ (解放出版社刊 2023.12) 660 円
- ◇特集 部落問題と向き合う若者たち 11
- ◇東京音楽通信 日本の芸能の原点を学ぶ DVD 『芸能と差別—文化を生み育てた人々』のススメ 藤田正
- ◇部落女性が受け継いだ大切なバトン 婦人水平社 創立から 100 年をむかえて 宮前千雅子
- ◇「見えない存在」として生きる部落ルーツの人たち 自己防衛としての「語らない」という現実 吉田加奈子
- ◇部落解放史の最前線 13 大正デモクラシーと水平運動の成立 朝治武
- 部落解放 848■ (解放出版社刊 2024.1) 660 円
- ◇特集 現代的識字運動のすがた
- ・やすことさちこ わたしたちの解放運動 塩谷幸子
  - ・30 歳の誕生日を迎えたソウルオモニ学校 チョン・ギョンヒ
  - ・いま、「識字運動」の原点に学ぶ 神戸長田・識字教室「ひまわりの会」の実践から 桂正孝
- ・大学の人権教育と長田識字教室ひまわりの会を結んで 新保真紀子
  - ・部落解放文学賞 50 年 その識字部門が柱に 日野 範之
- ◇本の紹介 河村義人『エヴリンの幻影』細見和之
- ◇100 年前の「福田村事件」が今に伝えようとしていること 関東大震災福田村事件 100 年犠牲者追悼式に参加して 藤田正
- ◇部落解放史の最前線 14 男子普選体制と水平運動の展開 朝治武
- 部落解放研究 219■ (部落解放・人権研究所刊 2023.11) 2,200 円
- ◇特集 地域共生社会づくりにおける隣保館の可能性
- ・「特集 地域共生社会づくりにおける隣保館の可能性」を組むにあたって 福原宏幸
  - ・自治体隣保行政および隣保事業についてのアンケート調査結果—その分析結果から見えてきたもの— 福原宏幸
  - ・地域福祉の推進政策における隣保館の新たな可能性 田中聡子
  - ・部落差別解消推進法と隣保館の役割・課題 谷川 雅彦
  - ・ソーシャル・キャピタルと地域力の視点からみた隣保館とまちづくり 寺川政司
  - ・隣保館事業は「社会保障としての防災」ともなる 菅野拓
  - ・セツルメント論史とトインビー・ホールの検討 山本崇記
  - ・訪問レポート—隣保館・自治体聞き取り調査の結果より— 川野英二・白波瀬達也・田中聡子・棚田洋平・谷川雅彦・寺川政司・福原宏幸・四井恵介
- ◇識字・日本語ボランティアの現状と課題—意識調査の結果に基づいて— 上杉孝實
- 部落解放研究くまもと 86■ (熊本県部落解放



的権利、社会権—金耿昊

■日本史研究 734■（日本史研究会刊 2023.10）750 円

◇特集 戦後史研究の新たな地平—「人の移動」と「境界」の視点から—

- ・日本人の引揚げ—朝鮮引揚同胞世話会を中心に— 木村健司
- ・引揚げの記憶/報道/研究における「娼婦」の他者化—黒川開拓団・遺族会の経験を通じて— 山本めゆ
- ・戦後日本の出入国管理と「境界」 李英美
- ・国籍・戸籍と国民国家—「日本人」の創出と支配— 遠藤正敬

■はらっぱ 407■（子ども情報研究センター刊 2023.10）800 円

◇特集 セクシュアリティを考える

■ヒューマンライツ 427■（部落解放・人権研究所刊 2023.10）660 円

◇特集 障害者の政治参加

◇識字運動の担い手たちが語る 34 識字教室があったけん、親のことがわかった（前編） 中原サヲ江さん（市場・川崎識字学級） 編集：菅原智恵美

■ヒューマンライツ 428■（部落解放・人権研究所刊 2023.11）660 円

◇特集 「差別されない権利」を実現する

◇識字運動の担い手たちが語る 35 識字教室があったけん、親のことがわかった（後編） 中原サヲ江さん（市場・川崎識字学級） 編集：菅原智恵美

■ヒューマンライツ 429■（部落解放・人権研究所刊 2023.12）660 円

◇特集 人権行政—地対協意見具申と今日の同和行政

- ・同和行政の今後の方向～同和問題・部落差別問題の転換期に当たって～ 炭谷茂
- ・「特措法」終了後の同和・人権行政の推進へ、何が確認され実践されたのか～「特措法」失効

前後の当時の大阪の動き～村井茂

・人権行政に同和行政が位置づけられているか？—鳥取県の動向 坂根政代

・地域共生社会めざす隣保行政へ 宮本太郎

◇識字運動の担い手たちが語る 36 隣保館職員、住吉で生きるということは、わたしそのもの（前編） 平澤富士子さん（住吉輪読会・元担当者） 編集：菅原智恵美

■部落解放 844■（解放出版社刊 2023.10）660 円

◇特集 「全国部落調査」復刻版裁判・控訴審判決のインパクト

- ・画期的な高裁判決踏まえ上告審の完全勝利へ 片岡明幸
- ・東京高裁の審理における力点 河村健夫
- ・東京地裁判決、東京高裁判決の意義と課題を比較する 中井雅人
- ・救済法から見た東京高裁判決の意義 金子匡良
- ・社会学から見た東京高裁判決「残る10県」にこだわる 阿久澤麻理子

◇本の紹介 李大佑『マイノリティの星になりたい—在日コリアン教師<本音と本気>の奮闘記』 呉永鎬

◇美空ひばり 女王が背負ったニッポン 1 少女期スターへの滑走路を準備した母と父 藤田正

◇部落史の調査・研究と人権に関する教育・啓発を推進 佐賀部落解放研究所創立40周年にあたって 太田心海

◇巨大レリーフと野仏 彫刻家・金城実のもう一つの世界 川瀬俊治

◇部落解放史の最前線 12 帝国主義体制と融和運動をめぐる分岐 朝治武

■部落解放 845■（解放出版社刊 2023.10）1,100 円

◇特集 解放教育 学校を変える 被差別マイノリティの子どもたち 10

■部落解放 846■（解放出版社刊 2023.11）660 円

区・柳原銀行記念資料館の訪問報告 かわすみか  
ずみ

■崇仁～ひと・まち・れきし～ 16■（崇仁発信実行委員会刊 2023.11）

◇特集 京都市立美術工芸高等学校  
・崇仁児童館の児童たちの取材より

■月刊スティグマ 327■（千葉県人権センター刊 2023.10） 500 円

◇差別とは何か、偏見とは何か 20 講演録「差別の社会学入門」 福岡安則

■月刊スティグマ 329■（千葉県人権センター刊 2023.12） 500 円

◇差別とは何か、偏見とは何か 21 記者としてハンセン病史の只中にいる自分と出逢う（泉潤さん聴き取り） 福岡安則&黒坂愛衣

■地域と人権 1248■（全国地域人権運動総連合刊 2023.9.15） 147 円

◇メディアの「差別まだあるあるキャンペーン」を糺す 4 植山光朗

■地域と人権 1249■（全国地域人権運動総連合刊 2023.10.15） 147 円

◇メディアの「差別まだあるあるキャンペーン」を糺す 5 植山光朗

■地域と人権 1250■（全国地域人権運動総連合刊 2023.11.15） 147 円

◇メディアの「差別まだあるあるキャンペーン」を糺す 最終回 植山光朗

■地域と人権京都 893■（京都地域人権運動連合会刊 2023.9.15） 150 円

◇田中地域の冠婚葬祭の文化を学ぶ

■地域と人権京都 894■（京都地域人権運動連合会刊 2023.10.1） 150 円

◇水平社と寺田清四郎 1 西村優汰

■地域と人権京都 895■（京都地域人権運動連合会刊 2023.10.15） 150 円

◇水平社と寺田清四郎 2 西村優汰

■地域と人権京都 896■（京都地域人権運動連合会刊 2023.11.1） 150 円

◇水平社と寺田清四郎 3 西村優汰

■地域と人権京都 897■（京都地域人権運動連合会刊 2023.11.15） 150 円

◇水平社と寺田清四郎 4 西村優汰

■地域と人権京都 898■（京都地域人権運動連合会刊 2023.12.1） 150 円

◇水平社と寺田清四郎 5 西村優汰

■地域と人権京都 899■（京都地域人権運動連合会刊 2023.12.15） 150 円

◇水平社と寺田清四郎 6 西村優汰

■地域と人権京都 900■（京都地域人権運動連合会刊 2023.1.1） 150 円

◇水平社と寺田清四郎 7 西村優汰

■であい 738■（全国人権教育研究協議会刊 2023.9） 160 円

◇人権文化を拓く 310 内密出産 堀越理菜

■であい 739■（全国人権教育研究協議会刊 2023.10） 160 円

◇人権文化を拓く 311 「俺は先生に自分の子を任せたい」の言葉を胸に置きながら 荻原敏行

■であい 740■（全国人権教育研究協議会刊 2023.11） 160 円

◇人権文化を拓く 312 大阪コリアンタウン歴史資料館を拓く 伊地知紀子

■であい 741■（全国人権教育研究協議会刊 2023.12） 160 円

◇人権文化を拓く 313 ChatGPT の普及と部落差別問題 松浦広明

■日本史研究 729■（日本史研究会刊 2023.5） 900 円

◇特集「人権」概念の歴史的再定義を目指して

・日本における人権の土着と変容—国体と人権の一体化— 森島豊

・部落解放運動と<人権> 友常勉

・自由廃業運動の全国的拡大と「人権」問題—1900年の娼妓・芸妓の契約をめぐる当事者の闘争を中心に— 林葉子

・在日朝鮮人の人権をめぐる諸問題—国籍、民族

- ◇戦時期在日朝鮮人土木労働者の社会 鶴森晃
- ◇李北滿の解放後の活動—統協・民社同での活動について 池山一男
- ◇或る日朝友好運動活動家の軌跡—日本朝鮮研究所事務局長の日記およびインタビュー記録を通して 吉澤文寿
- ◇資料紹介 日曹天塩炭鉱「稼働成績並賃金収支明細表」昭和20年6月分 長澤秀
- 社会文学 58■（日本社会文学会刊 2023.8）  
1,980円
- ◇特集 差別と文学 水平社 100年
- ・対談 映画『私のはなし 部落のはなし』について語る 監督・満若勇咲 聞き手・川口隆行
  - ・水平社100年から今へ—普遍的人権を求めて— 黒川みどり
  - ・部落問題は「通説」を疑え 秦重雄
  - ・差別（論）と文学をめぐる覚書 渡邊英理
  - ・「恋・結婚」において〈橋のない川に橋をかける〉ということ—「創作メモ」を糸口に『橋のない川』を読む— 江種満子
  - ・戦後部落解放運動と被差別部落女性の表現 後藤田和
  - ・差別と東北—水平社100年によせて— 河西英通
  - ・『革』文学運動の46年 善野焔
  - ・40年を越える歩み—部落問題研究所文芸部会の軌跡 小原亨
  - ・解放の父 松本治一郎への手紙 関儀久
  - ・部落の教え子たち 河村義人
  - ・識字運動とその表現—部落解放運動の識字学級 1960年代から今日野範之
- ◇新刊紹介 秦重雄著『映画「私のはなし 部落のはなし」を観て 部落問題を深掘りする』 小正路淑泰
- 狭山差別裁判 540■（部落解放同盟中央本部中央狭山闘争本部刊 2023.5）300円
- ◇石川一雄さん、早智子さんインタビュー 60年目の狭山決意新たに
- 人権と部落問題 976■（部落問題研究所刊

- 2023.10）660円
- ◇特集 相次ぐ生活保護裁判の勝訴と生存権保障
- ◇文芸の散歩道 水平運動の闘士・平野小剣をモデルにした長編小説 江口渙『人生の野火』 秦重雄
- ◇人はみな人と接して人となる—同和教育と部落問題へのとりくみ— 14 山田稔
- 人権と部落問題 977■（部落問題研究所刊 2023.11）660円
- ◇特集 人権意識調査をめぐる問題
- ◇続・同和地区の識別は人権侵害か—東京高裁判決から考える 丹羽徹
- ◇文芸の散歩道 島崎藤村の小説『破戒』の評価は大局的な観点から—自己体験『破戒』の海外版告白場面から考える 桑原律
- ◇人はみな人と接して人となる—同和教育と部落問題へのとりくみ— 15 山田稔
- 人権と部落問題 978■（部落問題研究所刊 2023.12）660円
- ◇特集 いのち脅かす健康保険証の廃止
- 振興会通信 172■（同和教育振興会刊 2023.9）
- ◇同朋運動史の窓 78 左右田昌幸
- 振興会通信 173■（同和教育振興会刊 2023.11.25）
- ◇共同声明 関東大震災朝鮮人虐殺事件から百年を迎えて 同朋運動を続ける七者協議会
- ◇同朋運動史の窓 79 左右田昌幸
- 振興会通信 追悼特別号■（同和教育振興会刊 2023.11.30）
- ◇小笠原正仁先生を偲ぶ
- 信州農村開発史研究所報 164・165号■（信州農村開発史研究所刊 2023.9）
- ◇佐藤芳嗣理事を悼む 斎藤洋一
- ◇「戌の満水」による浅科地区の被害 2 斎藤洋一
- ◇史料紹介 長野県知事による市川五郎兵衛への贈位「内申」 斎藤洋一
- 人民新聞 1812■（人民新聞社刊 2023.9.20）
- ◇日本で唯一、部落民が作った銀行 京都府崇仁地

- ◇隣保館で展開する地域生活支援～地域生活支援とは何かを考える 西谷清美
- 語る・かたる・トーク 343■ (横浜国際人権センター刊 2023.9) 550 円
- ◇語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う 「人権子ども塾」レポート 狭山事件～ヘイトスピーチ 吉成タダシ
- ◇部落史 学び直し 問い直しのススメ 30 近世の身分制の成立 1 歴史の流れと社会の変化 外川正明
- 語る・かたる・トーク 344■ (横浜国際人権センター刊 2023.10) 550 円
- ◇語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う 「人権子ども塾」レポート 東日本大震災～臓器提供 吉成タダシ
- ◇部落史 学び直し 問い直しのススメ 31 近世の身分制の成立 2 武将たちの野望を阻んだ人々 外川正明
- 語る・かたる・トーク 345■ (横浜国際人権センター刊 2023.11) 550 円
- ◇語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う 「人権子ども塾」レポート 「人・こと・バシヨ」 吉成タダシ
- ◇部落史 学び直し 問い直しのススメ 32 近世の身分制の成立 3 戦国時代を生きた差別された人々 外川正明
- 語る・かたる・トーク 346■ (横浜国際人権センター刊 2023.12) 550 円
- ◇語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う 「人権子ども塾」レポート 「楽しいことばかり」 吉成タダシ
- ◇部落史 学び直し 問い直しのススメ 33 近世の身分制の成立 4 江戸幕府の支配と弾左衛門 外川正明
- 関西大学人権問題研究室紀要 86■ (関西大学人権問題研究室刊 2023.7)
- ◇近代東京の都市周縁社会と「国民」化—1880年代～1920年代— 吉村智博
- ◇エンパス傾向とセルフケア 串崎真志
- ◇居場所の包括連携による全国モデルづくりに向けたアクションリサーチ—大阪府高槻市における市域広域事業の取り組みから 2— 岡本工介
- ◇ふたつの「婦人の自覚」から—高橋くら子は何を訴えたか 宮前千雅子
- 国際人権ひろば 172■ (アジア・太平洋人権情報センター刊 2023.11)
- ◇特集 国内人権機関設立への課題
- 在日外国人教育 8■ (全国在日外国人教育研究所刊 2023.8) 1,000 円
- ◇特集 全外教元会長 藤原史朗追悼
- ・藤原史朗さんを悼む 山本重耳
  - ・藤原史朗さんの在日コリアンに関わる実践と運動を振り返る 小西和治・史朗さんの時代を想う—兵庫の教育現場— 藤川正夫
- ◇特集 日本語教育と在日外国人教育
- ・無意識化している私たちの差別性—在日外国人に関わって学んだこと— 尾坂紀生
  - ・差別の現実から深く学ぶ—自己の課題とする— 坂口俊広
  - ・日本語教員の役割—外国ルーツの子どもたちと関わって見えてきたこと— 尹チョジャ
  - ・学校と日本語教育—「今」のよい経験、そして「将来」の日本語へ— 武一美
  - ・『共生社会のためのことばの教育—自由・幸福・対話・市民性』から学ぶ 山根俊彦
- ◇書評
- ・野入直美著『沖縄のアメラジアン—移動と「ダブル」の社会学的研究』(2022) 藤川正夫
  - ・林晟一著『在日韓国人になる—移民国家ニッポン練習記』(2022) 山根俊彦
  - ・宮内秋緒著『歴史を見つめる—日韓の大切な人たちとともに』(2022) 尹チョジャ
- 在日朝鮮人史研究 53■ (在日朝鮮人運動史研究会編 緑蔭書房刊 2023.10) 2,400 円
- ◇歴史家・姜徳相の生涯と学問—在日史学研究序説 韓光勳
- ◇社会政策審議会と朝鮮人渡航問題 1 福井讓

- 隔離 ハンセン病療養所附属保育所に収容された子どもたちの人生』黒川みどり
- ◇京都府連女性部の狭山再審闘争の取り組み 3 松尾晴子
- 解放新聞 3080■ (解放新聞社刊 2023.10.25) 115 円
- ◇監督ら制作側と話し合い映画『福田村事件』めぐり
- ◇「熱と光」にみちびかれて 部落解放への教育 10 森実
- 解放新聞 3082■ (解放新聞社刊 2023.11.15) 115 円
- ◇まなぶつながる うごきだす 識字のいま 18 菅原智恵美
- ◇しが部落史研究会を設立 来年の県水平社 100 年に向けて
- 解放新聞 3083■ (解放新聞社刊 2023.11.25) 115 円
- ◇「熱と光」にみちびかれて 部落解放への教育 11 森実
- 解放新聞 3084■ (解放新聞社刊 2023.12.5) 115 円
- ◇本の紹介 『ラクシノクラシ よき日のために Part3』 千本水平社 100 周年に歴史、教育、まちづくりをカラーで 堀家由妃代
- ◇まなぶつながる うごきだす 識字のいま 19 菅原智恵美
- 解放新聞 3085■ (解放新聞社刊 2023.12.15) 115 円
- ◇まなぶつながる うごきだす 識字のいま 20 菅原智恵美
- ◇第 1 回西光万吉文化・平和活動奨励賞を受賞人 権劇団 熊本・「光座」
- ◇本の紹介 部落解放同盟西成支部編『詳伝 松田喜一』 井岡康時
- 解放新聞 3086■ (解放新聞社刊 2023.12.25) 115 円
- ◇本の紹介 鎌田慧著『忘れ得ぬ言葉—私が出会った 37 人』 伊藤満
- ◇「熱と光」にみちびかれて 部落解放への教育 12 森実
- 解放新聞 3087■ (解放新聞社刊 2024.1.5) 115 円
- ◇2024年新年インタビュー 石川一雄さん・木本久枝さん
- 解放新聞大阪版 2331■ (解放新聞社大阪支局刊 2023.11.15)
- ◇映画『福田村事件』におけるハンセン病患者の描き方 赤井隆史
- 解放新聞大阪版 2332■ (解放新聞社大阪支局刊 2023.11.25)
- ◇[水平時評] 「部落探訪」削除へ裁判闘争 47 支部 総体の闘いとして 赤井隆史
- ◇自分らしく生きるためのルール 田中一步さん・近藤孝子さん
- 解放新聞大阪版 2334■ (解放新聞社大阪支局刊 2023.12.15)
- ◇衡平社 100 年とまちづくり 韓国各地で歴史と実践学ぶ
- 解放新聞京都版 1264■ (解放新聞社京都支局刊 2023.10.1) 70 円
- ◇朝田財団が「朝田善之助賞」創設 部落問題解決へ研究を助成
- 解放新聞京都版 1267■ (解放新聞社京都支局刊 2023.11.15) 70 円
- ◇「よき日」へ—それぞれの歩み 京都府連・同盟員への聴き取りから 7 追悼 原田眞智子さん 1
- 解放新聞京都版 1268■ (解放新聞社京都支局刊 2023.12.1) 70 円
- ◇「よき日」へ—それぞれの歩み 京都府連・同盟員への聴き取りから 8 追悼 原田眞智子さん 2
- 解放新聞広島版 2474■ (解放新聞社広島支局刊 2023.10.15)
- ◇半世紀前広島の部落解放運動は 12
- かけはし 7■ (香川県隣保館連絡協議会刊 2023.10)

# 収集逐次刊行物目次 (2023年10月～12月受入)

—各逐次刊行物の目次の中から部落問題に関係のあるものを中心にピックアップしました—

■アイユ 391■ (人権教育啓発推進センター刊 2023.12) 225 円

◇北から南から人権啓発最前線 舳松人権歴史館

■明日を拓く 137■ (東日本部落解放研究所刊 2023.9) 1100 円

◇特集 夜間定時制高校の現在

◇古文書を楽しむ 12 小頭退役願い (「鈴木家文書」1055) 古文書を読む会

■IMADR通信 216■ (反差別国際運動刊 2023.12)

◇特集 包括的反差別法を世界のトレンドに

■ウィングスきょうと 178■ (京都市男女共同参画推進協会刊 2023.10)

◇図書情報室新刊案内

- ・関口洋平著『「イクメン」を疑え!』
- ・リンダ・スコット著『性差別の損失 なぜ経済は男性に支配され、女性は排除されるのか』

■ウィングスきょうと 179■ (京都市男女共同参画推進協会刊 2023.12)

◇図書情報室新刊案内

- ・『未来からきたフェミニスト 北村兼子と山川菊栄』
- ・クラウディア・ゴールドイン著『なぜ男女の賃金に格差があるのか 女性の生き方の経済学』

■ウトロレター 5■ (ウトロ平和祈念館刊 2023.11)

◇西宇治中学校がウトロ平和祈念館で人権学習

■解放新聞 3076■ (解放新聞社刊 2023.9.15) 115 円

◇まなぶつながる うごきだす 識字のいま 14 菅原智恵美

■解放新聞 3077■ (解放新聞社刊 2023.9.25) 115 円

◇「熱と光」にみちびかれて 部落解放への教育 9 森実

◇京都府連女性部の狭山再審闘争の取り組み 1 松尾晴子

■解放新聞 3078■ (解放新聞社刊 2023.10.5) 115 円

◇まなぶつながる うごきだす 識字のいま 15 菅原智恵美

◇[本の紹介] 阿久澤麻理子著『差別する人の研究 変容する部落差別と現代のレイシズム』片岡明幸

◇京都府連女性部の狭山再審闘争の取り組み 2 松尾晴子

■解放新聞 3079■ (解放新聞社刊 2023.10.15) 115 円

◇まなぶつながる うごきだす 識字のいま 16 菅原智恵美

◇本の紹介 福岡安則著『聞き取り もうひとつの

## 事務局より

### 《出張研修・講師派遣のお知らせ》

当センターではかねてより「当センター内での研修や地域・学校での学習・講演会への講師紹介」事業を行っています。特に「同和問題(教育)」、「教育保障(夜間中学)」に力を入れています。研修などをお考えの時にはご相談ください。

□所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター 3階

□TEL/FAX 075-415-1032 □E-mail qm8m-ndmt@asahi-net.or.jp

□URL <http://shiryo.suishinkyokai.jp>

□開室時間 月曜日～水曜日・金曜日・第2・第4土曜日10時～17時(祝日・年末年始は休みます)

□交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口駅」(京都駅より約10分)下車 北へ250m